

城の崎に行って

辻 憲男（文学部教授）

志賀直哉の「城の崎にて」はどことが名作なのだろう。わずか五、六頁の短編である。大正2年（1913）、山の手線にはねられて大けがをし、城崎（きのさき）へ養生に行った。秋冷の三週間、ハチ、ネズミ、イモリの死を見、死なずにすんだ自分の命を考えた。簡潔な文章である。「他の蜂はいっこうに冷淡だった。巣の出入りに忙しくその傍を這いまわることがまったく拘泥する様子はなかった。忙しく立ち働いている蜂はいかにも生きていう感じを与えた」「他の蜂が皆巣へ入ってしまった日暮れ、冷たい瓦の上に一つ残った死骸を見ることは淋しかった。しかし、それはいかにも静かだった」。重く沈んだ心が、静かな谷あいの自然と融和する。「生きていうことと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった。それほどに差はないような気がした」。

作者は30歳、前年東京の家を出て広島県尾道の千光寺下に住んだ。松江、京都南禅寺、千葉県と転居した。十年来、実父との不和に苦しんでいた。長編『暗夜行路』のモチーフもそれである。結末近く、主人公・時任謙作は、大山へ向かう途中で城崎に一泊する。「いかにも温泉場らしい情緒」と「温泉場としては珍しく清潔な感じ」がよかった。翌日、香住（かすみ）の大乗寺にも寄った。

「城の崎にて」を書いたあと、父と和解した。さらに、尾道以来二十余年をかけて代表作『暗夜行路』を完成し（中断9年間を含む）、作家は小説の中で、ようやく自分にひと区切りをつけることができた。



兵庫県豊岡市の城崎温泉。浅い流れの両側に、“細い千本格子のはまった二階三階の湯宿”が軒を並べていた。